

## はじめに アフリカを歩く

### 新しい現実

「これが、人口爆発ということか」

人、人、人。どこを見ても人がいる。人混みにもまれ、暑さと湿度、汗のにおい、物売りのかけ声と車のクラクションの音で頭がもうろうとしてきた。自分が、世界の人口爆発の現場に立っていることをまざまざと実感した。

アフリカで最大の人口を抱えるナイジェリア、その中でも最も人口の多い最大都市 Lagos の中心部でのことだ。あちらこちらで人につかり、うかうかしていれば車にひかれそうになり、通りを埋め尽くす人の多さに圧倒される。どこまでも続く人波を見ると、まるで世界を変える大きなエネルギーが渦巻いているかのようにだった。

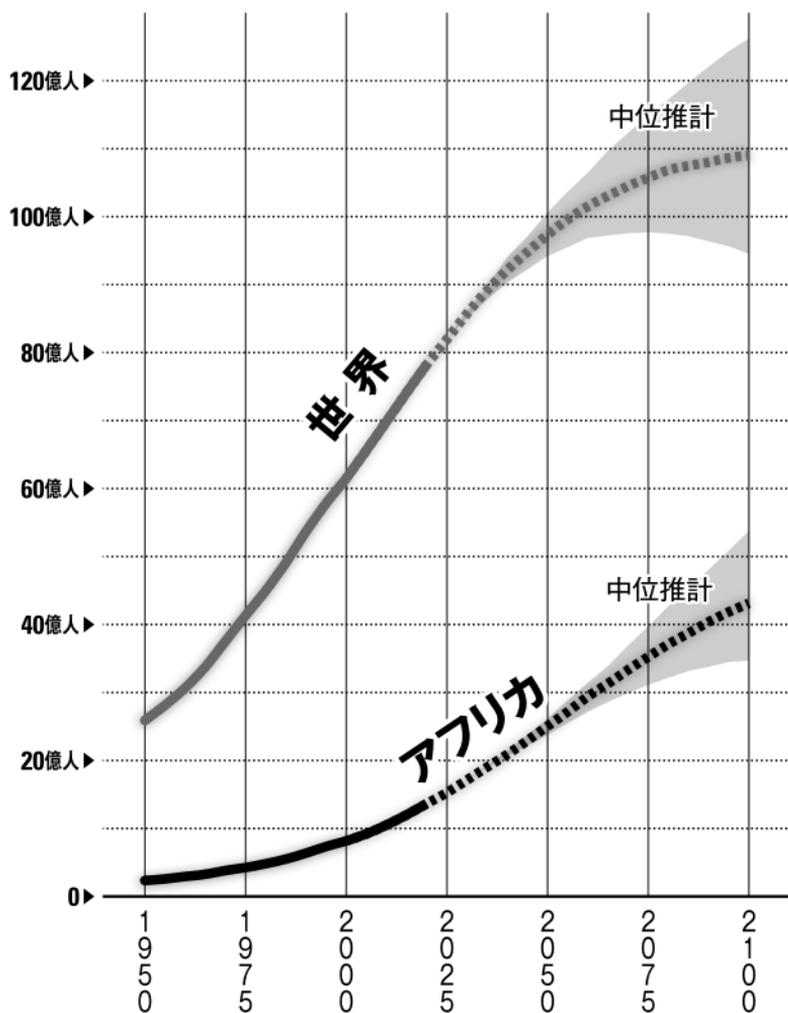
アフリカの人口は文字通り、爆発的に増えている。

国連の統計では、アフリカ大陸の人口は、1990年には6億人あまりだったが、今ではその2倍以上の13億人あまりになっている。そして、今後も増え続け、2050年までには、さらにほぼ倍増して25億人近くになると予測されている。その時、世界全体の人口は100億人近くになると予測されているので、地球上の人間の実に4人に1人がアフリカの人になると見られているのだ。

ナイジェリアは、すでに2億人を超えているが2050年には4億人を超え、エチオピアも今の1億人あまりから2億人を超えると予測されている。急増する人口の背景にあるのが高い出生率で、サハラ砂漠以南のアフリカの国々では合計特殊出生率の平均が4・7となっている。中には、ニジェールのように7・0と世界一高い国もある。

それにしても、2050年といえればわずか30年後のことだ。中期以降の人ならば、これまで生きてきた年月をふり返れば、30年なんていかにあっという間に過ぎる時間であるかは実感できるだろう。その時、アフリカの人たちが大勢いる地球はどのような姿になり、我々はどうのような世界の景色を目にすることになるのだろうか。政治でも経済でもアフリ

## 世界とアフリカの人口推計



アフリカの人口は増え続け、2050年には世界人口の4人に1人がアフリカの人になると予測されている。(2019年の国連統計より)

カが大きな存在感を持つ世界で、今の日本の若者たちは、どのようにビジネスをして生き抜いていくことになるのだろうか。

はつきりしているのは、これまでとは違う「新しい現実」が、我々の前に現れようとしているということだ。

### 地球最後の巨大市場

その急増する人口は若い。

国連によると、アフリカの人口の平均年齢は19・7歳だ。日本は同じ統計で48・4歳である。こうした若者たちは消費意欲も旺盛だ。家電もスマートフォンも飛ぶように売れている。若者人口の増加が経済成長を押し上げている国も少なくなく、世界銀行のデータでは、2019年のGDP（国内総生産）の伸び率は、ルワンダで9・4%、エチオピアで8・3%、ガーナでは6・5%と非常に高い。

もともとアフリカは天然資源の宝庫だ。国連によると、アフリカ大陸には世界の金の40%が、プラチナの90%がある。ダイヤモンドやコバルトの埋蔵量も世界で最も多く、まさ

に「宝の山」だ。しかし、こうした資源頼みではない、若者人口の急増に押されて、いわゆる「人口ボーナス」の恩恵を受けた形での経済成長が起きているのだ。

それにつれて、アフリカの街並みは急速に変わっている。各地で建設ラッシュが起きていて高層ビルの工事がいたるところで見られる。エチオピアの首都アデイスアベバを10年以上経て訪ねた時、そのあまりの変化に違う街に来たかと思つたほどだ。主要道路の両側には高層ビルがびっしりと建ち並んでいる。街のいたるところで建設工事が行われていて、取材先のオフィスでも、取材を終えてホテルの部屋に戻っても、工事の音は早朝から夜遅くまで止むことなく続いている。ビルに加えて、港や道路などのインフラ建設も続々と進んでいる。しかも、その需要は今後も大きく伸びることが確実だ。

こうしたアフリカを世界のほかの国が放っておくわけがない。アフリカは「地球最後の巨大市場」だとして、そこを目がけて、熾烈な進出競争が起きている。

2018年1月、アメリカのドナルド・トランプ大統領がアフリカを侮辱する発言をしたと報じられ、アフリカへの無理解と無関心が表面化した。依然として、アメリカはア

フリカにとって重要な貿易相手国だ。イギリスやフランスといった植民地時代の宗主国は、言語や文化を通じた影響力を維持している。その上で、イギリスはフリカへの投資を増やすとしているし、フランスはイスラム過激派への軍事作戦のため部隊を派遣するなどアフリカ重視の姿勢にぶれはない。

そこに国を挙げて押し寄せているのが中国だ。巨額の融資とインフラ整備で存在感を見せつけ、中国人も続々とやってきている。南アフリカやアンゴラにはそれぞれ20万人以上が暮らし、大陸全体で100万人を超えたといわれている。さらに、トルコやインドもアフリカ諸国での大使館の設置を増やしていて、存在感を高めようとしている。

こうした中、日本は、政府が主導してTICAD（アフリカ開発会議）を開催し、日本企業によるアフリカ投資を増やそうとしている。ただ、出遅れも指摘されている。滞在する日本人の数は中国の100万人に遠くおよばず1万人にも満たない。現場では日本の企業駐在員や援助関係者が汗を流しているが、そうした努力をどうバックアップするのが課題になっている。

気候変動、格差、砂漠化、テロ……問題が続々と

「これからはアフリカの時代になる」と話す人もいる。

確かに魅力的な若者たちが活躍する、希望にあふれた大陸であることは間違いない。南アフリカのヨハネスブルクやケニアのナイロビのような大都會では、最新のスマートフォンを手におしゃれをした若者が颯爽と歩いている。植民地主義の名残ではあるが、それはそれとして、英語やフランス語といった公用語を自由に操り、軽々と世界とつながっている若者も多い。

2019年秋、日本をはじめ世界中のファンを沸かせたラグビーのワールドカップ大会で優勝した南アフリカチームに注目が集まったが、黒人で初めてのキャプテンとなったシヤ・コリシ選手は、さまざまな人種やバックグラウンドを持つチームをまとめ上げ、活気と変化に満ちたアフリカの姿を印象づけた。

しかし、先行きは決して明るいだけではない。

経済成長が続く一方で貧富の格差も広がっている。特に南アフリカは深刻で、ヨーロッパの植民地支配と人種差別の体制を乗り越えたものの、人種間の経済格差は根強く残って

いる。

また、アフリカは、地球の気候変動をもたらす温室効果ガスの排出量が世界で最も少ないにもかかわらず、その悪影響が最も激しく現れている。サハラ砂漠南側のサヘル地域の国々では、拡大する砂漠と頻発する干ばつで食糧生産が打撃を受け、多くの人が飢えと渇きに直面する中、IS（イスラミックステート）のようなイスラム過激派組織が台頭し、テロと暴力の新たな主戦場にもなっている。

さらに、多くの国で紛争も続いている。豊富な天然資源を誇るアフリカだが、コンゴ民主共和国やカメルーンではその利権争いを背景にした武力衝突に歯止めがかかっていない。

### 人類の命運を握る大陸

しかし、アフリカ自身にとってはもちろんだが、世界にとっても、もちろん日本にとっても、このような問題が続くアフリカのままであってはならない。

もとより、そうした問題は、気候変動をとってみても、我々日本のような先進国の人間によって深刻化し、アフリカの人々がそのつけを払っている面もある。それだからこそ、

貧困や飢餓、それに環境破壊やテロなどはたんなる一大陸の問題だと先進国の人間が決め込み、時折思い出したかのように興味を向けるだけでは済まないはずだ。しかも、今や、アフリカの人が世界人口の4分の1を占める新たな現実が現れようとしている。それを前に、アフリカの課題は、国際社会が力をあわせてともに解決策を探るべき人類共通の課題だということがますます鮮明になっている。

いってみれば、アフリカは、我々人類のあり方を問うている。

資本主義のグローバルな展開は世界を覆い尽くし、ヨーロッパからアメリカに移った成長の勢いはアジアに移り、今、アフリカにもおよび始めている。アフリカは、世界の資本主義システムのいわば最終ランナーであり、そこが希望の大陸になるのか、それとも絶望の大陸になるのかは、人類のこれまでの発展の努力が成功だったのか、あるいは失敗だったのかを見極める場にもなるだろう。

その舞台は巨大だ。アフリカ大陸の面積は日本のおよそ80倍で、世界の大陸のおよそ5分の1を占める。ほぼ真ん中を赤道が通り、54の国が集まっている。「アフリカ」と一括ひとくりにするのがはばかられるほど多様で豊かな文化があり、多くの人の個性的な生き様があ

る。人類が臨むことになるいわば最終試験の合否は、この大陸とその人々、そしてそこに日本を含めた国際社会がどのように関与していくかにかかっているともしえる。

世界は、そして人類は、どちらに向かうのか。我々にはどのような新しい現実が待ち受けているのか。地球の未来の姿を探し求めて、アフリカの現場を歩き始めた。